花筆のたもと　下

冬哥

初冬池

冬されし枯野の原て氷ぬ池はさひしかりけり

同じく初冬

山の端の梅の木の葉のちりはてゝ深くもみちは冬そ知らる

朝時雨

吹さむき時雨ふる朝(?)はあけて(?)おもふ(?)

月前時雨

風さえて月にかゝる浮雲の中に見えてふりけれと

時雨(?)ふる雲の松の一むらしくれに月もかゝる(?)けれ

風前時雨

こゑたてゝさそひし山の嵐にはまつふりそふるしくれ哉

浦時雨

さす舟に雲のかけしてぬる宝れよの浦にふるしくれかな

山家時雨

山ちかのうきふしにさすおとのしくれぬる谷の下いほ

時雨驚夢

ねさめのさむくときえぬもしくれけり驚夢はあとはさむけり

時雨晴陰

浦風にさそはれ行うき雲のかゝるはしくれ哉

みちのちゝめ梅尾まて

風さむみけふの嵐にいかならむことしの紅葉あらん

谷落葉

まれにみるこの谷川の紅葉もまたよりかけぬる哉

林落葉

散ゆくも紅葉路にそめてさゝ山のこのしたはしはしる雲

山野落葉

秋風にあらしの山風にさそはれて散るもみちは

河落葉

山かせのふるゝりしてあらす川なれはたちよるこみちさそはれ

落葉深し

水底にしつみもやらぬ大井河ちる葉のさゝらゆらん

池落葉

経秋おちはさなりて池水によをみつのまことなかきる子

霜色落葉に

しら浪の上にこほれて心ある物の吉野に霜にたゝまれ

旅人落葉に

ふるさとの浅茅か中につもりつゝのこるもみちもさひしかりけり

古村落葉

こからしのさそふ嵐に心あるのしつか軒端もあらはれにけり

落葉似雨

松かせのおとゝみしまに時雨ともまかふ落葉のちるらむ

社頭落葉

こゝろしのうれよそ人も詣て庭のうへにちる紅葉哉

落葉に埋菊

菊の上に落葉のつもりてまつ人にとはれてさくはさしかれ

残菊

みるもなほ白ふきの白菊をはゝよりうつろひそめにけれ

菊花映水

底のよまにそふこれかみの深にうつれて菊の光見ゆる也

残菊白妙

時のうつろひの菊はあるしなてみるも命のうきあやとられ

旅人残菊

秋すきとかれさりつるふるさとよ人もまつらむ白菊の花

旅宿残菊

旅衣きる時までのうつろふ秋しやとの志らきくの花

雪松

山のべの浦嶋か磯の松雪はかさなりまてもむすはれけり

葉の色めてし埋みは松の雪をさるとも千代のまつかぜ

松上雪

ここにしも咲きつまりし松の上の雪見てそ秋は時よりも

旅宿雪

草まくら旅にし宿の夕暮れよあはれ山ちかき里の宿

雑上雪

みやまきくらしと咲つもる雪よりは秋よりも霜の旅の衣

雪

山ふもとのえの松はあれよの峯の雪はやかて旅人をあはれむ

ふる里ても咲く花の山の木の葉をそよの雪ふるは

古海池

拾てたる松の陰までも雪をそへ池の面かな

瀧邊落葉

おちつもる木の葉のうちに奥山のたきつせみえぬ落葉なりけり

宗順法師

木からしのさそはれもつる紅葉をもまかれちらの浪にまかせて

前中納言

山かせの紅葉ちりにし谷の下川

風光法師

おちつもる紅葉にせきとめられて瀧つ瀬も

同上法師

落積る木の葉のした行水の音はかり

寒草風

枯のこる庭の草葉の荻の葉にそよきて吹風の音

山家

霜かれの草の葉ことにおく露の山の下草

庭草常和

みれはまつ庭の荻の葉の秋のよすかに

杜

鳥の音のしける草葉の下露

大あらきのもりの下草あきの

またねにもして浅茅原これをそうとむしのなく

江辺寒芦

よりくるしまれ入江の芦のふしまにしもおきまよふ夜半の月かけ

堀江寒芦

石垣のうつまし汐のみちひもまて見えぬ芦ハ霜枯すなり

冬深草

浅ぢふもなくて冬の野の浅茅原のうすみとりにそうつろふ

庭上木枯

ふるさとの軒の梢ハてらされふるさとに吹ゝる木枯

椎柴嵐

実のならぬ落葉をしつる椎柴の枝をとおりて嵐あらしふく

寒松

冬枯の野にはかりける緑とて松ことにあはれなりけり

むつれふるゆきにつもりぬ松の実の落葉にも日もはれぬ山の庭

山寒松

奥山のえふれし深の松よりそ神代からしの外のみそ見れ

庭上寒松

まかれぬるはしのの庭松のかけみえすもさひしかりけり

寒樹交松

梢さへみなかれはてゝよそめにはまつそとりもなき色

窓前見柳

はらひつくるあつさもまさる我やとの柳か枝もみえわかれける

霧秋月

月影のさえぬるまゝて白妙にまかへる霧の光なるらん

嶺上見月

みちのくのなとふし見ゝ根の嶺にはるゝ月のかけかな

橋上見月

霧ふかき渡りし跡に見えつる月秋さえわたる野の橋

湖上見月

なかめやる山霧秋のゝ嵐吹清て月をとてみれしかの大わた

林中見月

風わたる月の雲しはれゆけはかくるゝも霧の立つにして

池月清明

そのまゝに池に宿れる池水にすみて清きも見えつるその夜の月

田家見月

大根かす新嶋あたりに宿る田家れさその見その秋の月

里庭見月

志らす菊も枯しますらの庭のまさき葉霜にさゆる月かな

社頭見月

雲の上よりかけし縄の影そめて度会宮に見そのまの月

落葉月明

紅葉ミな散はてゝ嵐の月はいかにてりまさりけれ

月照雪

ふりつもる雪に光そへて月やさすらん松の梢に

雪月照梅花

照月のかげをも照そへて梅さへ雪にまがふ宿かな

みつの月のさえまさる秋

大庭の月に向ひて見るのよしも雪るゝ秋やらん

原上霰

小笹原うちふれて霰の音に行ける旅寝かな

柏霰

風あらみあらふ柏木の枝葉にもさや霰ぞまじる

旅宿霰

玉さゝやさゝの葉かずに霰ふりて旅ねの夢ぞ覚

湖邊秋月

須磨の浦やその浦波の風よこそ秋も月ぞすみける

月前秋風

月清く海の面に光もなくてみるかな

空晴秋風

空のくもをちらはん清き流まつりてみゆるかな

湖上千鳥

二郡も絶ひさゞ浪船寒の声に乱れ梶をとにふたゝび千鳥なくなり

海邊千鳥

浦ちかき浦の神楽をつくる夜の嵐にまじりて千鳥鳴なり

橋千鳥

ゆふなみにあしまの波や海士しわたすをのへにて千鳥鳴なり

濱千鳥

行舟も浪ふく風もすゞしりて大なのうらの濱つたふ千鳥鳴也

月前千鳥

夜あらし霜の上白く月さえて千鳥鳴なりよその川ぞ

渡千鳥

よるとも岸によりくる波の音みてぞ夜ふかく千鳥鳴なり

千鳥有情

難波の浦に汐よる清よりも千鳥友あらそひつゝ行

打寄千鳥

うきわれのつまこふ千鳥とこしなへの寒き梢に千鳥鳴なり

水鳥

河ひろみひろふ汐ひれにむれ鴨はやさしくはしあへず

このもとき翅ありけるあとくのあれにとまる世にすむらん

深夜千鳥

みなとの細き江に水さしのぼる秋潮に池は雪やゝつもるらん

丹羽秀寄

水底の月にみるしるしあれや若草の野や霜おくらん

若月能寄

庭の池のさゞなみよするとも網に雪やつもらんとはるゝ

雲霧寄

霜も流るゝ月やみだれにも霜の宿りにけり

寒夜霜寄

みあらしのあつまにふすまもゆきもうちはらひけり

ちらぬはなもさきにと見えしあかね霜にふりて

網代

たが代にかひをのよるせつもりゆかれてかぬあじろに月やすむらん

網代寄

夜嵐に河せの波やかゝるらんあじろの床もつらゝゐるなり

曉天網代

かり寝の紅葉はよそにあらはれて木の葉のこるあじろなりけり

待千鳥

なかなかにまつ人まちまねき枕の松原にもあらざれ

朝初雪

こよひのまきさゞ庭の雪にけさ初るこそつもるらん

禁庭初雪

あらたまの年のはじめにふる雪は庭のおもてにつもりゆきけり

湖雪

舟出せしみなとのうらもたえたえに氷りてみゆる都のおもかげ

雪海群山

ふじのねの雪にまぎるる空の色に雲のたつみぞ雪の積もれる

遠近山雪

ふるさとのあしの浦に舟とめてきのふとみれば雪ぞ積もれる

暮晩雪

むらさきのねやとはまん雪をみて見えずし松の枝かな

雪埋山路

みちもなくうれし山路の松がえの雪をふみ分けかへる旅人

荒野雪

枯野の草も雪に埋もれてかすかのきは野辺にけぶりにけり

深庭雪

人とはぬ庭の雪には跡もなくふりつもりぬる

寒夜雪

よもすがら風のさむけき山すそに深雪の雪のつもりぬる

暮雪

けさの朝戸のひらくにさむき雪のつもるなりけり

雪埋篠

結ばれし雪に山路のさゝの葉もうつもれはてゝかよひけり

舟中雪

ぬれ衣のうへに河風吹そへてさむくも雪のつもる

吹まよふみの風にみたれてしつ心なき雪となる哉

竹の雪折

雪折の竹のよはに夢さめてたれ待のよにつもる空かな

雪中花

これ木にハ雪にまかふと思ふまで天の花さくまも見えけり

雪中求宿

雪深きみちにまよひの旅衣やとかるへき宿やあらまし

大鷹狩

大空のかすみに鳴てうかれ来る雲のよそにもかへるまなさん

鷹狩猟雪

うちむかふ野への雪はふかけれと鷹のゆくへをあさると

雪中鷹狩

はしたかの鈴の音に心ゆきふかき野に猶つもれとも

みかりするの雪のちるまもみかきて涼しき風の吹まよふ

鷹狩獣

たかのとりのよるのかみにはきゝすをとりて鳴行

猪坊衣

うちえみてこぼれ村雨のあともかよたまりつゝ露

炭竈鬼

すゝきのほのかにまねくきしの蛍も白露も

三夜秋姥丸

風さそふあきはよそにはれ行の音よすゝむ月やまのはら

猶鶴垣丸

たまゝ恋しいかにて垣のよるにこもる人こゝはまのさいはい

暁垣丸

深きむ里の垣丸おもき露てすみの声をも猶いはれぬ

暁のねさめ枕の床よこれ行あさかほ垣丸の神そまなかり

宮野丸逢保

人すまは恋ひせしをしのよこそんあさかほ垣丸の滑り居て

風吹丸

秋の風吹ふきてとみてなれぬをいはれて世のよ恋こゝろん

雪中辨示

雪みちは世の初音あしつかりてさそうにきこゆこゝろの下露

峯雪

さ浪いかすれぬ深きなほよおもかてゆ時のこ何そまもん

てもかくてつしも露よ君のこゝろ嬉しやいさんぐ出てやりん

都梅香

梅か香は[illegible]都の[illegible]にきこえこそすれ

平親長

霞にも隔ぬ里の[illegible]も[illegible]梅の[illegible]

新中納言

難波江の芦のかれ葉の[illegible]春は[illegible]

志り[illegible]

いつくにも[illegible]香に[illegible]

早梅

この春の花のてらのみに先さきて[illegible]の梅[illegible]

早梅似春

咲そめしあの梅に来てみれは雪にまた[illegible]まちも吹

早梅喚鶯

春風のかほりは早く吹ぬらんうくひすのなけ梅にきこえん

冷泉為村

鶯の[illegible]にてらんとしも[illegible]の雲深く[illegible]

為秀

春風のあらし[illegible]梅もひとしき[illegible]

為泰

香深き雪の[illegible]の梅の[illegible]

冬月

木からしにさそはれいつる山の影さえていとゝさむし谷川の月

冬獣

雪ふれはよわりもされて小牡鹿の声よはりゆく路のことな
み深山のこみちやあれぬらんさとにもなれて
ひとつにも火桶よせてそ老人のまとゐしあかすよるそ

恋歌

初恋

しのゝめやうつき始ぬる時なりに思ひそめけり鳴はしめつゝ

忍ふ恋

紅のこゝろにそむるは色に出てものいはぬ身のかひやなからん

思ふ恋

うきを見し人の心そまちなからなにはにつけて恋の思ひの絶えせん

別恋

このたひはなつかしき世をわかれても又あふことは待つるなれ
さゆれともしかもみなみのはこ恋は神無月にや契りそめけん

かくしても思ふ折のうへはなほ秋の袖にあまる露かな

結空恋

陸に結あはれも空の雲のつらぬいたひの心は浮雲

不逢恋

待わびぬる身の許すまじとは不逢秋物はおもひやるまし
つれなき人ひきかぬまてもつら秋不逢恨は増そはれ

隔物恋

こゝろは垣をへだてゝ白露にあけはてゝかたくも思ひはれ

寄木恋

葛城のうちに咲花の色もつれなき松にて人の心あらん

寄枕恋

むつひあへぬよのことも人目つゝみてつれなき手枕をしのぶ

逢不逢恋

一夜のみ結ぶとおもへはいくよや後の契りとさえなるまじと

後朝恨恋

待もありなんとの下にぬふ涙よるうらみに恨みぬるやよその身の後のあさき

旅恋

旅のねの枕のよの中の結ぶ夢も世のことおもひよるよしやなくる

人増恋

うへは見えしもまたの人の花の心よ猶の手にふれてまさる宿

まつ恋

まつ宵に匂ひ袖かさくらむめつくしとこそめくる袖の香

秋萩寄恋

あき萩のうはれてぬるとこそ萩が枝の乱るるさまにさかりける

秋風増恋

秋の夜にことみまさりて葛の葉のうらみつつまさるとしもふく秋

初雁恋

おきもせてうは初雁をさきたちのいりふくるや涼しきたちあかしかな

互忍恋

あひみてもまさりける人はいかにおもふ心のすゑのまたくる人もあれ

切恋

清けくも移りゆく人に恋するはぬれしもいつまでと思ふ

驚恋

うき人のこころの秋によそにしてこそ色袖かさむ露のまさりける

みられぬ影のあさましさにまたいかにもとしもいふぞすみれ

忘草恋

またものもふるにいやましのうふるの中にあとかたもなし

つれなき恋

ふけにけりまくらのうへの露の一夜もくるゝまでも

恨後縁恋

うつゝのうらみしもなきてしたぬ絶ぬるまての涙なるらし

難忘恋

忘れすの思ひのつれなきそ恋のこゝ袖よのこゝる秋かな

聞名恋

すくしれとたつ名のみの恋やよ乱て消かへるらむ

恋情

人をのみ思ひそめぬるのこゝろなりたゝも志らぬらむ

人妻

はかなくも人のつまの妻とはにつき恋のそうかれ

志らぬあやなく人の妻やの何そきこよりうちて袖ぬらすま

寄月恋

わか中はいさよふ月の影の絶とやまたも暮かたさるらむ

寄河恋

志ら河の末の思ひ河末つはまつれたるへをはおもひかけかと

寄萩恋

かはらんともよりすゝ萩のこれ露にまよふとかれん

寄露恋

あはれの花すれて我ならま露すへてそれまつもいくかかり

寄霞恋

春霞さりへのかすけやまほとめくりぬれも志る人のなさき

寄篠恋

うれしさにいつかはしらましのはらにかくこゝろそあやうき

寄松恋

いつ方にねさしそめて姫松のつもるよはひを我にまさらん

寄紀伊逢恋

ゆめよりのおもかけ月よりもあはさらんとおもひしかひもなくそありける

寄霞恋

おもひよるなみよりも山霞の霧もこのくもやたちかへるらん

たえまなき袖にもなみのたちてうらみわたるふかきうらみのかなしさ

ふせやとはかくる身にはうつろふ袖のなみたのいつゝもゝ恋なし

寄獣恋

心からこひの言葉とおもひそめて世をうつしもなからへるゝ

恋の路とも

あふ事は海のこちらて恋ひにまさるゝよのなかそかなし

雜歌

日

むさしのゝうゑよ白かや和雲のゑめよ入日の影のうつるなりけり

松下暁月　雅胤

あけぬるの山松のはの間方にさしくる月の影ぞさびしき

野熊山月

ふる深きみねより影さしそめて月そのこれあさくら北山

暮山雲

あけのさむ夕暮の入のおぼゆるにしらぬ雲のかゝれ

山中瀧

たえずなむ人のなをよ奥山のたきつせよれの清き流はあるらむ

さくら咲よしのゝ奥の瀧つせは雲よりよに落るしら浪

深山瀧

奥山の木ゝの雫もつもりてや瀧つながれとなりにけり

秋色雲

ぬれつゝもよるの雲路をわけしよりきよき代の光にてらす

ある所にて

雲なき空に晴わたる月も見えねは雲のたえまもゆかしき

秋の夜の月の詠まつるに

秋の夜の雲よに光あらそひて月の影みるあかなくに

妹背山

世の花にかよふいもとせとなしに音のはも持つゝかゝる

卯花杜

神まつる卯月のけふの縄にそ雪にそ旅人はぬらし

不知哉川

大よそにありさまをとへいさや川いさよふまつらむ

吉花并清流

久方のてれまさの月の影はえて千代の影やうつしけり

花下鶴

さしよて住り鶴さくらの花の影にけれゆふかな

磯浪

あら磯の岩にうちよせてこそ散浪も むかしながらのあらましをし
海邑院

おきつ浪松にかゝりて歌をきえ 時雨の海のおもかけの松
存仁小松

千世の松すむ人もあまのこゝろの庭のこすゑは生るらんとも
果庭松

ちりつもる木の葉やまちてまつの松をまつれ山かけの庭
宗栄宗石

猶すむさらに山もとのつゝけかの岩かの音も 志つかなりけり

山里

このあつむひともあらぬ宿に時雨てすみするうちの山さと
山本政

静かなるむかひの岸にしるしの松をふきし谷の下いほ

酒さけ岩井にうつる影にみえてかすか浮ふる人の庭
山本甫

里人の言つてまても猶かはらぬ岸のさくらのころ
山本源

山ふかくかくれし人も大宮にいてつかふるならひもなし
山本方

さりとは世をもいとはれて山里の煙をそへてすみつくあはれ

山家松

山かけの末の一本にそれまてはしらぬかすみのいはねかな

山家夏

静けさは山さとにある人の葉と人すれはこそ雨のやとり

山路秋

年経たる松の梢にやとりける木末の山桜かな

山家人稀

誰とはで静かに世をよりうき山里とはとふ人もなし

うき世をすてて なのみれ山里にかくれてもさすかに人すまずして

鐘声何方

いりあひのかねのこゑそほのか あけぼのもみえぬ山ちかく

鐘声送雲寺

かねのおとはくもにまきれて山寺の梢にしらむ有明の月

電衆螢

いなつまの影にまかへていりつきよりやみも涼しの光すみけり

松桜花

万代のためしにちかし松か枝の花は流れてゆたかなりけり

盆栽松

ふところのふちの松の姿に世をしめて松もあはれ

湖上秋風

みかみ山ことに秋かせすゝしく吹風寒しさゝ浪の湖

松風入琴

更ぬとてうちぬるよりの雲あてとさや松のその声ぞまさらん

夜松風

うつゝの嵐に吹しよその峰や秋その松のあらしなるらん

竹風如雨

呉竹の葉ずゑの音やわたる雲の雨よりまされぬるらん

鶴

ねつきなき千代の影に住なれて齢かそへの千とせをや見ん

江鶴

あかつきの月影寒て鳴くあの声すさまの江に浪のあしたか

海辺鶴

神かぜの吹をもすさう鶴ぞ影に立ぬる秋の声ぞ聞ゆる

芦辺鶴

夜ならで田鶴よ打しも難波潟あしまわけて鶴ぞ鳴なる

鶴驚揚天亀浮桂池とか秋

舞鶴の立けし池のようてかのはにさしきの声よりも鶴不老

柳上白鷺

白鷺の柳のえだにすみつゝ河の岸に影やそう哉

万木杜鵑

こずゑよりゆふべの月の影こえて杜鵑のなくもみな梢なり

林中鳩立

里ちかき庭山かけのねぐらにはたつもとのかやしなりけり

庭前鶯

たつ庭のとしのうちより梅の花にこそ鶯のきてをとづれすなん

荘

すまひよるいほりの竹のはやしにも鳴すゞめすゞめなる

隣鶏

まがきより渡るとなりの庭よりや宿の鶏もなけばなきすなん

三室山瀧

三室山みねよりおつる滝のいとのきえぬかぎりはかへらぬ

蝸牛

露ひかれのあとかたもなくなりぬれはつのをむすふ浮世なり

山蜂

花の香をたつねてはれは山蜂もさそひてうたふあはれなり

亀

動なく幾よの代をへてかめの尾をすくこそたのしき

海苑

春ごとの花はちりてもつきぬかな我やまとの

海中線

そこ深くしつめしいとはわたつみのあなたの国のたよりつたへし

彫刻書

きさみけり神代のふみを桜木にうつすもすなれかなのことのは

抜出新著

難波津のたえぬる言もきこえきて梅にあとなき花をそ見る

新聞紙

見しこともきくことまてもたゝちにあまたのあとにあらはれん

国旗

天つ日のかけをぬひ代のはた風にわか国のなの上にあかるむ

硯

すゑむらさきの海なみたつみよなれやふみのはやしにちりかゝるとも
深きねすみの海を人みつるよつゝんかたちあまたあれ

インキ

かきのほとくもむかしは墨のすりに海もなきすきのほかにけり

衣

いにしへのおもかけにしてなりしいろのきぬのよきものなからめ
たちぬはぬものかはきぬのいろも染こそまた

洋服和服

新旧のきぬもとりかへてかゝるきぬをこそぬふなれ

時計

時もうつ其のをりもつりはあはれ老ゆる世よとてあかれ

金時計

衣おも一重きて山頭の露もふるゝ時をしらすな

鏡

朝ことにかりそめのちりハなしても猶世のことよけんもはなよ

よし何の影をうつし見ぬ鏡もなかりはしけり

写真

辣さぶ翠のすさ見たのえかけいうつし恋の世の

乙く絵心もたえて猶さいやうつる俤の浪をうつしけり

短音蕭笛

一声笛の音もそとよりはさし出し月にかかれとはひとん

オルゴール

松風も波のひゞきも聞けるは櫛よりあてになれ

葡萄酒

葡萄の酒のむすそハ花の浪よ酔ひてきまもゆゑならず

蝙蝠傘

あめのよは涙そふかさぬ人かつまかけかり世のきまぬりさの山

掛物

あまるかぬ人のすさみのうつし絵の深山のつゞきそれて見れ

大頌

沖つなみてるまよ大つよ娘のなれ世のこゝろなりけん

浦船

風そよの三日のこゝろのいつて船いろはとりの世に浮かりけん

船中九鶴

春もはや明け渡すこそ来つゝも嫁ゆくまてそみなみなそれ

春月秋巳涼

有明の月のかゝるさす汐の音もさゝ波なみのこゝろよ

ありまつ船ゆく汐の音きゝて深くも秋すゝ春風ちらすれ

蕪家船

岩根つゝ打ちよせて大海よりくる人の一葉かけなりけり

杣川浅

ふりてもはなかる春たちそのいくつ山河のいつゝまやり

入方車

秋なりぬちゝるかならなりのまてやいつかゝるのふむ

蕪家車

まつみたき紅けり君のためまいはまとり紅のくらる清

蓬屋蕪家車

ちらぬかふ奉みはゆ花をも出世のゝうるよかつ三こゆ

鉄道

大君の御代はさかえて民までもゆたかなる世そ成にける哉

海上眺望

たえだえに霞める波の上にあまの釣舟のうかふ山

春のころあふ人のなさけもうすくなりまさりて

春の花のいろにそめぬ吹風の音につけてもたえぬ思ひか

羈中暁

うき旅ねも夢のまにまにさめて暁ちかきこゑきこゆる

羈旅中浪

みなとのたよりも浪のまつかせにたゆたふ舟の行かたも

寄月述懐

あはれとも思はぬ人のあけくれにとはれて月をなかめ侍る

寄雲述懐

なかなかに思ひこそ白雲のあとはかなくもへたてゝ

寄道述懐

つかのまの人の心もうつろひて人のあとをたとりなから

寄花述懐

花のちるよるの嵐のすゑもいかにとかこちてきくも

まちわびてたのむ人の心をもうけはなれぬ我身なりけり

寄露述懐

いろいろの花にもたのむ露の身をはかなき世にはまちわびて

寄鶴述懐

いはほのいつまてかうき世に経て後たのよしとは何すらん

寄雞述懐

ゆふつけのこゑも鶏のなくしてや何も思はぬ世にてあらなれ

寄貝述懐

あかしのうらによるうつせ貝むなしき名をや世にのこさまし

寄鏡述懐

みるたひに老のやつれは増かゞみ影をかはりし我かいつのまに

寄墨述懐

わかみをもそへき人の面影を世にみつゝそしらぬこゝろ

すみ染のすゝしき袖に老の世をつゝむこゝろはありともしらず

寄月述懐

大御代の風をあふきて藪も世のうちにすまずもあれ

寄藪述懐

難にてよはし家ありとよりみの藪の下ぞかなしき身の八重むぐら

追年懐旧

おい人の身にとりのこる昔しのみの思ひはかぎりなかりける

老後懐旧

物思ふ事忘れぬちとせの花の春をまつと思ひつゝもしらぬまなかん

観身岸額離根草といふなとも

伊勢のあまよりくる浦あきしの花のさかりかな

暁霞

鶯の声を待まちよ聞つけたるは霞はかゝらむ

鶴

男山さかゆく浦の鶴を見せて君か代もしのはさらむ

小児

たらちめのちをもとむる子のすゑや人のまことなりける

参謀長

何よしも家のつかさはすゝまんみつからのちゑあきらけき月

兵卒

あつさゆみ国のまもりの村長まつ何事よりも身をおさむへし

地方官

みあらかの深きめくみを民ことにしらするやかてみつかさの心なるらむ

君民同治

大君のみこゝろのもとにすむ民もともに栄ふる世こそ来にけれ

仁政

かれて後あはれみつのゆもさくやことしのはるをむかへけるかな

民務

ねもあしたつ月よ夜のをさめこそ人のいのちのかたちなるらん

労苦備百事

東都のありくまりきのかなしのこへのあそゝし白雲の影

沈雲

春閑の庭にしつかに志つかなる大のこゝろん世にとゆつき

住原宥衛

さつきの晩いおもしや星蛍のともしびのちらほらみなるらん

歌也蓬雨

をちこちのともし火をあかりにちらすもとなく志かけて村雨のそら

東西南北

清く泉あつまる道に流れ来て鳴てわたるはつかりのこゑ

樵窓の山

きよ山の奥まで告るあかつきの大空のあけほのことし

蓬人勝宗秘

いその山のこえつゝ猿の音も今はのころまくらにけゝらは

漢字

ともうへ人庭の虫のこゑなきのこゑたてぬ世にかなしき

銀竹

七夕のまとし山深の月影のうつろふ空の雲はれてやまん

刈宮院

流れゆく鳴るいつも竹の葉に江まかせ世になりゆくかな

燕鴎舎

おしなべて諸人までも正しきのことわりにすゝむ大きみの御代なりけり

東久秋子

ちりまがふさくらも白くふりて秋の雪とも清けなるかな

花のころ吹上のさくらを

ことなるはみよしのゝ山さくらかとおもほえぬ花の一もと

深きのことのよつとめして

みちのくのふきさらぎに梅すみその春は流れよと春過

ある女学校のもとめによりて

すゑあまたの学びの窓に文読みの人かをるやこゝろ深き

四海清

ありその家の雨やまて清風のさくらぬことのよるかりけり

世乱て君臣あるかなしいまとさま

浦々をよみてかはのあさましのあふさまにあはれ

ふもとの甲斐みそれ清くれつかな

みのるあたれ春まるゆきとうつきさかの花の根にもぬれて

清寧天皇

うつれし二つ木れ松もそむきてみのこゝろかなしみよ

惟喬親王

信濃なるその山の竹の品の中に埋れて世に出でさへぬれ

護良親王

いたつらに地をすりしよゝの行末の言繁のちりをはらはん
和氣公
世のためにつくす心のみちあれは神のこゝろはまもりつゝけん
忠仁公
さかゆへし我国の末やすらかにおさむるこゝろのひかりなりせむ
在原業平
忘るゝ身の心をしらて行すゑも我そのいまゝ衣きてゆかむ
菅公
すなほなるこゝろのいまあらはれて人のまことの思ひいまさん
紀氏

宮にたゝむたのさくらちるてふ春風のしへさもなき
小松大臣
君を思ふ心はかくりそくすゝやりのこゝろ見えこゝろのうち
富山帝君
浮きくもにかゝる月影ちりの山の中にも秋の月
梶原景時
石とれる心にかへし梶の末世にさえきこゆる
北條義時
望月のかけのみちてもかなしきはさかりのもの
北畠准后

こゝろある花のあはれもうつりてまたもみよしのゝ山
村上義光
紀の國の綱をみかくる心すゝめたゝかひけれはこそ
楠公
波の上にのこる沖つ鳥のあはれなり
新田公
このほのにはゐるたちはなのかたき
すゑの身をもとりて心にかけてもとめて
このよのはなのちりかゝる
児島高徳

咲かゝる世の嵐もたえて浦の松にかゝる
宗良親王
花ゝ波の色にしるき雲のひかり
楠正行
楠正儀
よし野山
北条時行
まつの木の梢にもみよ
上杉憲信

流ゆくすゑハ千くさぬ越の海川の網ひくくもあるらむ

林子平

流波に沈む涙も淀の名も流しすめる了恵のさやけき

常盤

はしる絹ぬへりまとはぬ衣をまとふへく夏のふるらん

小督

明ても世のさかりを露に埋れてはわするゝ浦の月の影

祇王

秋風にさそハれすく花露の袖もすさみたる

湯谷

虎の尾ふむ事すゑまてあゆみ越えて行きをやすきらむ

舜帝耕歴山

秋の日のさす国河の水田をもとゆかぬ民やすらん

漢文帝

その皇の徳をもて冠の行をとゝきつよ待へりまし

光武帝

おちる涙のあはれをはれやかなるものかなしまん

煬烈帝被荒中織

桃の花の色のふかき風にすゝみ乱れかけられたる

彭子

きりもたゞ手にすゞよ呉竹のもとをしらずとも此君

子猷

世をのがれしまゐりかきゐのあつきかゝるへんすめ

陶朱公

のち海のよりくる者はもりたふ兵ぞ一つ見れむかしのかきつ

孫子

たらすれて穂のまえをしてあやむつるるすまうすつかれ

蕭何月夜追韓信

まよひとの心あるをつよけの月も見ればよりよ

蘇武

ばし雁のうつりわたるやの雲ともはるかに海にうかむやうつら蝶たゝりむ

李陵

てらの鐘をきゝはいつる秋の身なのもはるかなる哉

謝安

けりそきまゝ人のすゝむ河にうつれ床よこゝろは

張翁秋別雲山

白雲はうつる山へよ東でそれは都の秋はこゝろのまゝ

蘇軾

宮ゐ江の月よりてひる鏡の声をまて此のかるふ

岳飛

山さとのこゝろね梅と見えけるはさくらはしめなすかな

孟母

あちらのこすゑにたゝ鶯や風にそふ心のにほひきたまへん

花落夫人

ますらをの猶もちるとなけれのにはとなくにほひはふて

華盛姫

陰山の冬の梅は紅の夜のそらのなかむとなるや梅ましし

徐世賓

雲井なる月はすゝきの上にも照る世に照る影のかはらぬ心の月

如安

神さひて世にあらはれし姫松のちとせのかけそのちれさくらかな

梅よ誉のこと

なかやさしよにとそてにかをれる梅ちる桜かな

南殿のさくら

三吉野の花のそてかをれる九重のこゝろに見えて南の花のひとへに

初さくらの一枝

春風もいまにほふなる桜を折しや思ひのすさひなれ

あし山

大井川花のさくらはいつしの世にちるみちをたのみつゝ

花のうつろふ月のかけ

かれにみちる月もかりのまくらによのやさしかるらん
　薪にも折をそへつる上にも月あり
あはれきく秋草それかや折るらん大かた山のおくのよそれ月
　ゆきの河のきしに花さく苗あり
かきつりきのつらも河まもちらん色つかくまへてとまり咲いまで
　夢に蝶
咲夢の世れ苗ひの色あるも折すに身に花ぞそふの色
　夢の花白きてまり
夢の世桜につゝそて咲すゝゆめのよあるかなきみらん
　八橋に杜若

杜若の有色に浅くよ風つきしの香のあまるらんそれ
　花蘭
天の代のまゝにあつめ蘭のちらに秋の色をかすらるる
　女草菊牡丹あまとめきまり
ふきつかもろにも浦にもん咲花のよき浅き萬まつらん苗
　御苗によききき河
ゆききに蘭すさやによみ苗の御色月影あきまうらん
　なき河のうら
色代のすゝ浅河のうら苗にと蘭あまうつゆめ待らん
　桔梗に女郎花

宗のゆかりのもとに隠居し給ひける時ちのたるきもさかりとも
隣州に紅葉ちりける
秋もてなす人もなしとて隣の河をも霞すゑられ
葉一ツとだにかくはなれぬる
あかねさすはさみ手にまた他人の種ぞ岩をの葉の一つとし
東天嶋に見えける
名残の鳩はた見をとめさんつるの一声にもまさりて
清緑殿の御歌
たちかへりさそへもあれとさえ御ことはの竹代の陰
見えて

あかねさす京の花の春もかはらぬ人もなし
賀しける元
こころさす人の中にその家にて[illegible]や重て月に待らむ
みなすの猿
身の谷にて忘れさる世の人まに見えぬ月に[illegible]ひさん
程のたよりに
つらきは昔むすぶ清代のいつらにも家の奈まで[illegible]
亀の三条縁起にそへられける
石亀のつかの浮てうき[illegible]あかれるもなかまに[illegible]
さ宗二歳殿詠歌

大まへのさくらハいまとみるゝこまふりてよ春風ぞ吹

万算

門松のみとりの枝ひきかへし咲ちる風や千代のこゑ

深夫

ふかきなのすゑは海のみどりよそふ山ざくらあさおのつるかる

与いゝきこ

引つめて顔さかみるやの一すらるよ花ふ心ハまた海ゝする春

けさうみえり

つとめのりよみこひさまでこあし此世春の花かれもろふん

花ゝをるはるをの宿も春ゝとまつの又よりやなつかしき神ぞん

あつらの営

宗着ほてはかりし人を拐きつやうちて花営の山桜もさす

桜井氏給之也

まつらちうきも桜井の花のらえし孫のあかつきあな

みよのかよりの春よ白さてえきそとうしそ桜井氏也

赤穂四十七士のうと

あつき与ひりしたまの海の花の浦やなつかしさむ

孔明捕つてよ寄らくしと縛ひくらと

うしろへの焉る花ふ其志つゆまりて法のまゝすしおりそのさむ

布袋

大かたやわが身のうきよやうき事の月日かさなりてすむ世を
布留河のへ
よき人の世にすみし袖も重ね年のそちらん
えひす布留のよるは幼子あつまり
うき世の世はかりのすまひとされ子の心や袖とひとつかん
福祢雲井かけし
清きよちりまじりて朝は黄なる袖をたゝへん
福祢よりしまのかみにしたる
動よおきしその月日も時雨に心苦山の陰のまゝん
福祢てりるうく

世の人のなげきこむる袖なれば涙の浦をさへあらむ
権大納言藤原卿これをかし秋庚の贈答にて
みるまゝにあはれもかなしくも過ゆく日数もなげくやらん
かなしき夫のこゝろさしなりける
花衣ぬれし袖のさよりまたれ露そへて露
まちかつき日もさそふ夫に折つかえて筋
ふかき山のすみさいなんかなのくる
ねざめし袖てふかきのちるまてつみえさにたよりあるみるや
かなしみつる陰によそもるるちた
見るらめすらし昔のそう月かゝる世のことまでもさらに残

亡篤之の三回忌によめる清大人のもとより

花の香の昔の草葉に世の中に残る物とはかなしかりけり
こよなくもあはれを残しつつ今も猶たえぬなげきや

日にそへて世の中うきを思ひしかどもなほしたはれ

八田翁の退隠に書告秋といふことを

秋来ぬと鳴虫の音にしらるなりてこころも宿は涼しかりける
波の音秋めくのみぞきこゆれ（略）

物ごとに一あれはしるしのみぞおもひ知られける
行織といふ人うせけるときによみて
蓮葉に涼しの露のたまのをにちりゆくおもひたえぬのみ

小田ゝ若翁の身まかりけるころ斉なつらそ
ねむごろにとひけるにかへし

君がくみの身まかりける時の涼しき
うつり代をとへど昔のかたみにて

あともなき草の葉の露ぞ秋やますらんとぞよめ
菊池大臣大人身まかりて久しく後二年にあたりけるとき
あはれなる故人のかたみに偲びて清大人のもとより
あまたとしのうちそへてよみける

ますらをのあとぬ我身の世はたゞみやこのうちにすみゐるに
うつろひし郷にたてて家つくりなむとすめる

高信大人のもとより

あさみとりそらの色れ紅山かのを雲みねよあかつれになる
　空いいかせさせ給ふよ

志ら人なまてられ空の紅山わかすくいさんて申しそかの人
　朝鮮人とおらや彼を談判の為を停友泰緻殿
　大使をうけて遠国よおもむきなされし年
　ごろれ申して帰りまつる事ほおそく

天か代に時も来れども秋ふかみ詠きれ高とあまる
　秋のころあるもの好音もへまする殺ひよ

あつきき夏の重陽にそこの風を詠するもあきかせん

秋のころいとわかつくし見ぬへしく里みねはしまらぬ
　時もうつり手に忘れ給ふ

九重の萩れかすかにいたるらん旅の中すゞも雨に過ぎける
　風のいふく涙ふりまる

宮城野すを露ふりかかる萩のおく花れ庭にかかる秋の露
　ものころ高信大人のおもと給ひぬの御ときも
　詠人すてまするいいことと

宮城野の露のみとたまつきへまして立するみ降る秋の風れ
　大人いよいよ詠ひてなさるゝかいなさるかなるれけさよ

下よのまれんのこなや月のけるに昨日よりうれさえ何秋の

あらし吹志賀のほとりたる松かれそ垣つきの
紅葉ミちよのさかとすゝみなかくの本
君か爲ことしもはやしむかひてゆかん我をこれ行りゆくり
とゆりなるへし
乃ぬにはそれ知らは紅葉もてかの綱ならはし
ある人の賀に寄石祝といふを
さゝれ石もちよにいはほとなるまてに千代かけきむへしる
大原野の遷幸の時社頭にて寄
神よりも神もまことのかみにへもろんぬ待ちたるかきり
寄若菜祝

君か代のことをまきのみのしまの小松葉をかそへつくして
寄橋祝
君か代はあまのとのかはらの石の数もあらふなるへき
寄天祝
千早振神代はきそかたまもすへきのことをあまり
寄月祝
萩野の於本なき清る月にてらぬ清代の光ありゆく
寄海祝
時しらぬ浦のうらも君か代の恵の方をやらんと
祝言適

君か代の千とせの数はかそへつくせとも尽きせぬ世にあへるかな

家の集といふものの世に撰ひのまゝを伝へたる人
あるはなきにしもあらねと世にまれにてそのかみの
きこえはまれなり さる紙のまゝにのこれるよみ
歌のみならす書きてつたへたるはまことに
わすれかたみの物のはやとおもひたまへ侍り
ころより家々の人の物をおもひてなさけかはし
あそふことものすてかたくよひかはしつつ
はひよささまに用にしたかひてはなりぬるの

うつし繪とハかゝれたる文字にとゞめつゝ
濃まきことに打見りを老ゆくまゝに要あい
教へし筆の跡もころのうち萌ぬかなりぬるハ
見習ひたるやうあやきわきよけり

あつ子

明治廿一年十二月二十日印刷
仝年仝月廿一日出板

著述兼版權所有者　東京府麻布區龍土町拾六番地　税所敦子

出板人　仝府日本橋區蠣売町壹丁目四番地　松井總兵衛